

地域自然・自然教育について

渡 辺 隆 一*

私達が扱う対象としての“環境”や“自然”といったものの全形があらわにされてきたと思われる。私自身の認識がなによりもそう思わせるのだが、社会的にも、自分達の住む町や村のぐりをとりまく自然的環境がいやおうなく意識されるようになってきている。そして宇宙船“地球号”といった少々飛躍した思考や、近年の衛星写真、空中写真の普及とも相まって、自分達の自然環境が目に見える形であらわにされると、それがどれほど貧弱で薄いものなのかが理解されるようになりつつあると思われる。また、最近の、気になる経済環境といった言葉にも直面して、地域の自然を、生活の場としての環境として再認識させられてもいるだろう。

生活に根ざしたこのような自然環境に対する社会的な理解や認識に学びつつ私達はなにをつけ加えることができるであろうか。その方向をさぐってみたい。

まず、上に述べたような社会的に理解されている自然環境とは一体どのようなものなのだろうか。それは一人一人の自然観とも相まって百人百様であることだろう。中には自己本位なもの、情緒的すぎるものなど多様だろう。そしてその実態をこそつかまなければならない。それは今後の自然研究や教育の実践のための前提となるものだからである。

次いで、社会的に意識されている形での地域自然の性格それ自体が科学的に、かつ総合的に明らかにされなければならない。これが本研究会のメインテーマでもあろう。その中味についてはこれまでも、そして今後とも研究、討議が進められてゆくだろう。しかし対象とする地域自然の大きさという点ではより多くの検討が必要だろう。研究会では“信州の自然環境モニタリング……”をテーマにかかっているが、必ずしも信州全体を対象とすることが最も重要であるとはいえないだろう。研究のレベルとしてはいろいろな大きさの単位性があるといいだろうが、実際の生活域としての地域自然はもう少し小さなものとなっているだろう。自然それ自体がすでに人為的なものによって切れ切れに細分されてしまっているのだから。

さらに進めて自然教育にもとりくんでゆかねばならないだろう。すでに前々報で述べたように、自然教育はその対象(児童、学生、住民、社会人等)によって異なっ

たものとならざるを得ない。しかしその基本はかわらないはずである。

自然や環境は、もはや個別的なものであるから、抽象的な教科書や講義では自然教育は十分ではない。適当な大きさの地域自然が教育の場として必要である。そして、現実の地域自然を観察させるとすぐにわかることであるが、そこには人為的なものと、自然的なものとの二面性がある。それが様々な程度に入りまじっているのが真の姿である。そこで関心はこの二つの方向に分離されざるを得ない。人為的なものに対しては、人がなぜそうしたのか、そうしたことによって、人間社会や自然にどのような影響が生じたのかという環境学的な認識が導かれる。それは個別的な、地域的なもので、さらにこうすればよかったのかという技術的な論議を生み、やがて望ましい生活環境といったイメージを作り出すであろう。一方、自然的なものによって、例えば美しい花、森の荘厳さ、小鳥やケモノをかいまみることによる驚き、などによって自然認識の入口に導かれる。こうした個別的なものから導びかれた自然認識もそれは容易に普遍的な自然観へと高められる。個別自然の理解、自然の一員としての人類、そして自然倫理をとおして、各自にとっての望ましい自然環境といった価値判断をうみだす。その判断が先に述べた望ましい生活環境の上につけ加わることによって、つまり、“人間と自然”との関係を考えることによって自然教育の実があがったといえるだろう。

環境としての地域自然に対する理解も進んできたし、その科学的な研究も進んできている。自然教育も少しずつではあるが教育界や、実際の自然観察会、自然保護運動の中で進んできている。こうした全体的な動きを見失わないように、それぞれの場面がよりよく進むように考えながら、今後とも努力してゆきたい。

* 信州大学教育学部